

# ◎市民活動に見る施策へのヒント

## ①野毛大道芸フェスティバル

■福田 豊

### 1 野毛大道芸の始まり

昭和五十八年、MM21計画が具体化し、野毛の商人は地域の地盤沈下の危機を深刻に感じ、色々な場でゲリラ的に侃々諤々（かんかんがくがく）の議論が始まった。

議論は次の二つの意見に集約された。

「街の活性化には、まず地域の住人、商人そして街に通って来るお客さんがお互いに仲良くなって色々な話をして、何かを生み出すことが大事だ。それには遊びの会をつくり、本腰と気合を入れて目一杯やろう、そのためには何物にも制約されず、自主財源でいこう」

「この街は戦後の爆発的な闇市のにぎわい以来、地域の組織がテンデンバラバラの自己主張をしたため、行政ほか各方面への交渉がうまくいかず、地盤沈下を続けてきたので、

氏素性がはっきりした地域の組織を一本化し活動をしよう」

そして、翌昭和五十九年に「野毛文化を育てる会」と「野毛地区まちづくりを考える会」が発足し、活発に活動し、一年後にそれぞれの会員が約二百名になった。「文化の会」は「野毛落語会」を毎月開催するほか、ジャズコンサート、座敷芝居、浪曲、野毛の今昔写真展などソフトの活動を主とし、「まちづくり会」は桜木町駅舎移動問題、後に東急線廃止問題等で行政と渡り合うなどハードな面で運動をしてきた。

そんな時に、野毛で飲んだくれて二十年、この街のことを書き残したいと思っていた人と、地域の物語を新聞で読者に届けたいと思っていた、これも野毛で飲んでいた新聞記者が「文化の会」で出会い、昭和二十年代、三十

年代前半の野毛の聞き書き「野毛ストーリー」が昭和五十九年十一月から昭和六十年六月まで六十回、週一回産経新聞の神奈川版に連載された。書き手・大谷一郎、挿絵・広野徹、題字・佐野守正、編集・広瀬勝弘。

なぜ昭和二十年代かというと、この時代の野毛の人達は敗戦、米軍の進駐、闇市の爆発的なにぎわい等特殊な体験と、それまでのすべての秩序と価値観がなくなった中で手探りでたくましく生き抜いたから。

この連載が野毛の人々に地域の来し方行く末を考えるヒントとなり、街おこしの議論がさらに活発化した。その中から野毛らしいイベントをやらうとなり、昭和六十年、「野毛地区まちづくりを考える会」主催で春と秋に「野毛祭」を開催。

その基本の考え方は「混沌とした闇市のエ



- ①野毛大道芸フェスティバル
- ②ヨコハマ映画祭
- ③本牧ジャズ祭

- 1 野毛大道芸の始まり
- 2 野毛大道芸とは
- 3 実行委員としての横浜

ネルギーを再現しよう」であった。そして次は、どこでやるかであったが、野毛にはホールや広場がないという物理的な理由と、かつて闇市があった場所でありたい気持ちが高く、道路でやることとなった。その際の伊勢佐木警察署の理解と協力に今でも街は感謝をしている。

出しものは露店画廊、人形芝居、フリーマーケット、辻音楽会、大道芸などであったが、闇市のエネルギーにふさわしく、すべてが投げ銭または値段つけ放題、値切り放題であった。その中で異様なまでにお客さんを引き付けたのが大道芸だったので、翌六十一年から大道芸だけに絞り込み今に至った。金なし、場所なしのないづくしの苦肉の策とも言える。

## 2 一野毛大道芸とは

僕らは路上で成立する芸事はすべて大道芸だとし、何でもありで色々なジャンルの芸が参加してほしいと考えている。

大道芸の中で野毛を際立たせるのは何かと考えてたどりついたのは、「三者イーブン」であり「異界をつくる」ことであり「じか取引」であった。

### ① 「三者イーブン」とは

演じたい者が演じ、見たい者が見て、運営したいものがやることである。だからギャンブルや日当はない。

四年前から静岡市が野毛のコピーをして静岡大道芸ワールドカップを始めた。市長自ら

が先頭に立ち市を挙げての事業となり、マスコミ系のプロダクションが仕切る五日間の大掛かりなもので今年で四年目になる。世界各団から芸人を呼び、コンペをして優勝者には二万ドルの賞金が支払われる。審査員を頼まれた永六輔さんは「大道芸人のランクづけはできない。強いて言えば投げ銭の寡多ではなからうか」と断った。

芸人にはギャンブルが払われ、現場の人も市の職員や商工会議所、青年会議所の人達が多いようで、それぞれが仕事としてかわわっているようだった。

芸人の感想は「コンペはナンセンス。野毛と大きく違うのは、町の人との付き合いがないのでとても寂しかったこと」であった。

しかし、三者イーブンのイベントは三者のバランスの上に成立していて、そのバランスの保証はない。

### ② 「異界をつくる」とは

通常の世の中のない時間と空間をつくることであり、道路という普段別の目的で使われている空間を数時間だけ表現者の自由にゆだねることである。

実行委員会としては幕開けと幕引きに最大の注意を払っている。いきなり「異界」が現れ、また瞬時に「異界」が消滅するために。

当然、主催者あいさつや司会進行はない。芸人が野毛に交通費と鰻井とカンビールで

来てくれる理由は、投げ銭が稼げるとか、芸の情報交換ができるとか、実験ができるとか諸々があると思うが、僕は異界で自由に思いっきり表現ができることだと思ふ。

劇場も異界であるが、多分、芸人にとって野毛の道路は異界の中の異界なのではないだろうか。大都會の日ごろたくさんの車と人が行き来する道が、交通止めになってステージとなるが、歩行者は自分勝手に行き来し、商店もいつもと同じ商売をしている。

僕たちはいつも新しい「異界」をつくることが面白くて今までやってきたが、そのことが芸人だけでなく実行委員の増員にもつながったようだ。いま現場に出る実行委員は約百名。全員ボランティアで大体七十人以上が野毛以外の入だ。多分、彼らの大部分は「異界」をつくり出す面白さ（一瞬のうちに小さな劇場ができ、芸人とともに出来事を共有し、すぐまた劇場がなくなる面白さ）が忘れられず、芸人という奇妙な人々と親しくなってしまう、毎回何か新しい出来事がおきるので卒業できず居着いているのではないか。そして、誰もやっていないことをやり、いつも多数のお客さんが来てくれる勝利感から。

### ③ 「じか取引」とは

実行委員会は大道芸の運営に関し、ほとんどのことは直接に執り行う。例えば出演交渉、現場の交通・雑踏整理、備品の調達、資金集め、場所借りや行政との交渉その他。

このことで非能率的な回り道や無駄な努力をしたりもするが、プロのイベント会社とは一味違う考え方や方法となり、プロではできないことが成立することがある。それが実行委員の喜びでもある。これはユニークさを保つ要素であるが、独りよがりになる危険もある。幸いに僕たちには「三者イーブン」があ



るので、その危険は回避できてきた。

今、若い実行委員は芸人と観客と、そして自分たちも、もっと楽しめるものにしようと藤代邦男実行委員長を中心に頑張っている。

### 3-1 実行委員としての横浜

横浜はその歴史の中で二回全国に発信し、日本人の意識と生活を変えた。開港期と第二次大戦直後だ。

創作や表現活動でも有島兄弟、長谷川伸、吉川英治、大佛次郎等、戦後は美空ひばり、ゴールデンカップスを生んだ。

二つの時期の共通点は、真空状態の横浜によそから人種を問わず多数が流入し、混沌とした状況の中で色々な出会いがあり、もみ合いせめぎ合いのあったこと。大多数が「腹に一物背に荷物」の一旗組や食いつめ者ではなかったか。

僕は混沌の中の出会いとせめぎ合いが横浜らしさだと思うし、そこにこだわりたい。言ってみれば横浜は毒味の街ではなからうか。毒味、実験されたものの中でよそに必要なものが流れていく——それが発信だと思う。

今、青森、新潟、福島、長野、大分から大道芸の開催依頼が引きも切らない。情報があるらんし、コンピュータが手軽なものとなった今、傾向と対策が世間の発想の基盤となっているようだ。

僕は毒にあたって頓死をすれば本望だと思っている。

△野毛大道芸フェスティバル実行委員・中華料理店主△

### 野毛大道芸の軌跡

- 第1回(61年春) パン猪狩・早野凡平・ヘルシー松田ら20組、26人の芸人がイクオ三橋のもとに集まり、2日間開催。観客3,000人。
- 第2回(61年秋) 亀田雪人・サイクル松林他31組の芸人が集まり観客動員も4,500人。人目を引いたのがフランスから参加したレ・ノクタンビュール。空中ブランコが野毛の空に舞い上がった。
- 第3回(62年春) 35組61名の芸人が参加。観客50,000人。初出場の現代民謡伊藤多喜雄は30万円の投げ銭を集め喝采を浴びた。この回から『野毛大道芸写真コンクール』を開催。
- 第4回(62年秋) 野毛本通りから野毛坂に会場を移して開催。50組115名の芸人が出演。観客70,000人。沖縄からの伝統武道が大人気。
- 第5回(63年春) 新装なった野毛本通りで華やかに開催。54組130名の芸人。観客は一挙に17万人。全国から注目されるイベントになった。ヴァイオリン演歌の桜井敏雄ら常連に新しいメンバーが加わり、フランスを始め海外からの参加も多くなった。
- 第6回(63年秋) 昭和天皇のご病気ご回復を祈願して中止とした。
- 第7回(元年春) 1日目は雨で中止。2日目は好天に恵まれて10万人の人出となった。伊藤多喜雄・早野凡平・雪竹太郎らの芸も花盛り。
- 第8回(元年秋) フランスからの空中ブランコを目玉に立体的なイベント空間を創出。会場を広げないと実施不可能になった。芸人281名、観客数15万人。
- 第9回(2年春) 昼過ぎまでの雨にもめげず開催。第3回から連続出場の伊藤多喜雄が前年暮れの紅白歌合戦に出場したためか、会場は一段と盛り上がり観客数15万人。この回から町のプロデューサーとして橋本隆雄が正式に就任。
- 第10回(2年秋) 早野凡平追悼公演。凡平さんの涙雨が降って1日目は中止。2日目はそのエネルギーが爆発して元気一杯に開催。特にバリ島からはるばる来日したバリダンスが好評。海外からのパフォーマーも28名になった。
- 第11回(3年春) ドイツ・ニュルンベルグからオールドサーカスの花形スター、マンフレッド沢田氏を招き国際化に弾みがついた。稼ぎ頭の伊藤多喜雄は2日間で200万円の投げ銭を稼いだ。
- 第12回(3年秋) ゲストにカナダからコメディアンのみスター・スマイスを迎え、海外からの参加15組。1日目は雨で中止。2日目はそれを挽回し大盛況。

- 第13回(4年春) ゲストに世界超一流の一輪車とジャグラーの2人組フライング・ダッチマンを迎え、その他海外からの参加を含めて両日で約200組500人の芸人が集まった。観客動員数12万人。日曜日は雨の降る中、傘もささずに見入るお客様の姿に次回からは小雨決行を決断。この回から町の人達以外のボランティアスタッフが運営に参加した。また、初めてスタッフ6名が、カナダ・モントリオールで開催の『ジャストフォーラフ』を視察。本場の雰囲気を見学し、以後野毛大道芸は格段に成長した。
- 第14回(4年秋) ゲストにフランスからパフォーマンス集団『イロトピー』を招く。芸術の薫りが野毛に漂った。また、『静岡第1回大道芸ワールドカップ』で『人間美術館』の雪竹太郎が二冠を獲得。他の受賞者もほとんどが野毛の常連。芸の水準の高さを証明した。
- 第15回(5年春) ゲストにオランダのディアボロの名手マイカ・アルデンを招く。芸人168組460人、海外から19組。国際都市横浜にふさわしいイベントになって来た。
- 第16回(5年秋) フランスからシャンソンとバーバリーオルガンの『アニー&アルタス』を迎える。その他世界にパフォーマーとして名を知られるダニエル・グルコ、マロらも参加した。野毛からもバリ郊外の町ノントールのフェスティバルに雪竹以下数名を派遣し芸の国際交流を実現した。11月に横浜市から『横浜文化賞奨励賞』『まちなみ景観賞』をダブル受賞。
- 第17回(6年春) ゲストにアメリカのクラウン『ローラハーツ』、その他フライング・ダッチマン、フランスのサーカス界をリードするクリスチャン・タゲも来日。海外20組、国内の精鋭53組。2日間天気に恵まれて観客も最高の17万人。しばらくお休みしていた伊藤多喜雄も出場した。夜の流し芸と同時開催。大道芝居も初公演し、3日間の夜昼通じてのイベントとなった。
- 第18回(6年秋) ゲストにフランスの路上音楽隊『テアトル・ド・ユニテ』を迎えて奇想天外な場面を創出した。カナダのクラウン『ギレン・ボール』、一輪車『ジャン・ソシエ』も活躍。柳通りが工事中のため桜通りを日曜日のみ使用。サンバの乱舞が人気を呼んだ。
- 第19回(7年春) 今回から横浜市が主催者に加わり、年1回1週間程度のロングラン公演を企画した。開催地も野毛地区の他MM21地区にも進出。多くの観客を集めた。スペシャルゲストとして、フランスからアクロバットチーム『ル・アクロスティッシュ』